

変わる起業の型と周辺環境

時代の変化や技術の進歩等さまざまな要因で、当然のようにその時代を反映する産業や事業経営の型やスピードに変化が見られ、起業のあり方にも顕著に表れています。

例えますと一つは、起業の動機です。これまでの私が見聞きした話として、本人の幼少期の家計が苦しく、身近な母親の髪を振り乱して必死に働く姿を見て、自分が早く家を出て立身出世をして、将来は家を建て、両親と一緒に暮らして楽をさせたいなどの話しはそこかしこに沢山ありました。

現在では平成 26 年 12 月 19 日日本経済新聞の記事に、高校時代にハンバーガーやドーナツなどのファーストフード店に行くのが大好きで、「将来は自分が日本発のファーストフード店を立ち上げて世界に日本の食文化のよさを知ってもらいたい」との、たこ焼きチェーン「築地銀だこ」運営のホットランド社長佐藤守男氏が紹介されていました。

二つ目は起業のスタートの時機です。

一般的には、一応社会に出て技術や人とのつながりや支援者の後押しで起業や独立をするのには、ひとつの時機の単位としてやはり 10 年は経過していたと思います。

しかし、現在は、大学や大学院に在学中や、社会に出て数年の若者が世に打って出て来ています。またそれとともに新規株式上場（IPO）にも意欲的で、1 例として私もユニークなビジネスモデルであると認めているフォトクリエイト社があります。

同社は 2002 年 1 月設立、2013 年 7 月に東証マザーズに上場の企業で、マラソン大会などで撮影した写真を、インターネットで販売するニュービジネスを展開しています。

三つ目は資金調達についてです。

かつて私もそうでしたが、サラリーマン時代より起業のため「種銭」を貯金して、とにかく起業のスタートをよりスムーズに安定させる手段だと思ったからでした。しかし、最近では、未上場のベンチャー企業による資金調達が活発になって、スマートフォンの普及を追い風として、ネット関連企業はかなりの額の資金調達が可能となり、金融や出版などの異業種がベンチャー企業に投資する例が散見されます。

従来は政策金融金庫や、地方金融機関からの資金調達でしたが、他にない優れた技術をもつ有望ベンチャーに対しては、恵まれた時代が到来したと思われまます。

四つ目は「起業の輪」の存在です。

日本経済新聞 12 月 13 日朝刊によりますと、12 月の IPO は前年より 6 割多い 28 社に達する見通しとあり、その背景には先輩起業家が後輩を支援するケース、米シリコンバレー型の「起業の輪」が日本にも根づき始めて来た、とのこと。誰しも他の法人の力を一時借りても成功への道すじをたどって欲しいものです。資金や経験を新たな起業家に提供する「エンジェル」の存在はシリコンバレーでは一般的で、これらの動きが今後正しい方向に進展していくことを期待しています。

世界的（欧米や中韓も含め）に比べて日本の開業率はかなりの低さです。

そして中小企業における転・廃業は増加して行きます。これから起業する人、経営をスタートさせた人は、時代の変化を先取りして、あらゆる面で最大限の努力をする必要が求められています。